

英国東部サフォーク州オーフォード・ネスにみる 20 世紀軍事景観の遺産化と自然化をめぐる文化地理学 ——ナショナル・トラストによる景観管理に注目して——

橘 セツ *

Setsu TACHIBANA

Looking at contested heritage of military landscape and coastal nature reserve at Orford Ness, Suffolk, UK:
landscapes managements of National Trust

I はじめに

オーフォード・ネス Orford Ness はイングランド東部イースト・アングリア地方サフォーク州の北海に面した海岸線に位置する。サフォークの海岸線は、崖、砂浜、砂利浜、礫浜、沼地、湿地など多様な地形が複合している。手元にある『ジーニアス大英和辞典』によるとネス Ness という語は、地名の構成要素としてある場合、古英語で岬 promontory を意味する。文字通りオーフォード・ネスは、海に向かって岬のような細長い地形を構成し、サフォーク海岸線に砂州を形成する。この砂州は、11 マイルにもわたる長さの礫浜 shingle beach を形成している。

オーフォードの集落からオーフォード・ネスに近づくには、渡し船でオー川 River Ore を渡らなければ着くことはできない。オーフォード・ネスは、東は北海に面していて、周囲から隔絶された細長い島のような地形である。実際、オーフォードの人々は、集落の対岸に位置するオーフォード・ネスを「島 island」と呼称していた (National Trust 2018)。

英国の国防省 (当時は戦争省 War Department) は、第一次世界大戦開戦直前の 1913 年にある計画のためにオーフォード・ネスの土地を買上げた。北海に向かって前線であり周囲から隔絶されたオーフォード・ネスの地形を利用して、ここに科学者を招き軍と協働して国防のため当時は最新機密兵器であった航空機の開発、性能を試す軍事兵器実験研究開発機関がつくられることになった。1913 年以来、オーフォード・ネスの軍事利用は第一次・第二次世界大戦の時代を経て続き、1950-60 年代の米ソ冷戦時代には、原子力兵器研究開発機関 Atomic Weapons Research Establishment が設立され、1953 年から 1966 年までの間に原子爆弾の実験が試みられたと記録さ

れる (National Trust 2018)。このように地形的特徴からも周囲から隔絶されたオーフォード・ネスの 20 世紀の大半は、英国軍が兵器研究開発を遂行した実験場であり Paddy Heazell の著書のタイトル『最重要機密オーフォード・ネスの隠された歴史 *Most Secret the Hidden History of Orford Ness*』(2010) にあるように一般人は立ち入ることのできない軍事領域であった。サフォーク海岸線の景勝地をたどる遊歩道であるコースタル・パス Coastal Path も、オーフォード・ネスの海岸線は避け、オーフォードの北に位置する音楽祭で有名な集落オールドバラ Aldeburgh の北から内陸へ向かいスネイプ Snape を通る迂回コースへとデザインされている (図 1)。

オーフォード・ネスは軍事兵器研究開発機関としての役割を 1980 年代に終え、軍事施設の建造物は使われることがなくなった。その後のオーフォード・ネスの有効な土地利用について国や地域政府でさまざまな議論された。最終的には 1993 年 4 月にオーフォード・ネスはナショナル・トラスト National

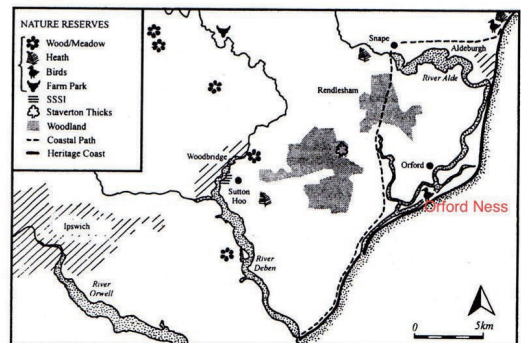


図 1 オーフォード (Orford) とオーフォード・ネス (Orford Ness) の位置 (出典: Martin Carver (2017) *The Sutton Hoo Story: Encounters with Early England*. The Boydell Press. p.vii を加筆)

* 神戸山手大学現代社会学部



図2 渡し船の船着場に着くと見学者はナショナル・トラストの係員から、オーフォード・ネス「島内」のガイダンスを受ける。注意事項として語られるのは、見学道を踏み外さないこと、毒物などが残留しているかもしれないので何にも触らない、拾わないこと、最終便のボートに乗り遅れないことなどである。

(2018年7月筆者撮影)

Trust for Places of Historic Interest or Natural Beautyに売却譲渡された。ナショナル・トラストは、英国の歴史的名所や自然的景勝地を保全するために1895年に設立された民間団体である。ナショナル・トラストは、1551エーカー（628ヘクタール）のオーフォード・ネスの土地を292,500ポンドで国（国防省）から買い取った(Cocroft 2009: 9)。ナショナル・トラストは、オーフォード・ネスを所有してから2年後の1995年からオーフォード・ネス・ナショナル・ネイチャー・リザーブOrford Ness National Nature Reserveとして一般公開をはじめた(National Trust 2018)。

1995年以降オーフォード・ネスでは、20世紀の大半の時を軍事兵器研究開発施設とした土地利用のもたらす残留物などの危険を取り除きつつ、安全性にも配慮しながら、ナショナル・トラストが中心となって、生態学的にも特徴のある砂州地形の礫浜や湿地の豊かな自然を呼び戻すような自然化のプロジェクトを行っている。かつて兵器実験場や航空機の滑走路などとして軍事利用された土地の一部は、湿地放牧地Grazing Marshとして牛羊などの家畜を放牧する伝統的な牧畜農業利用を再導入している。さらにナショナル・トラストは、塩水性湿地Saltmarsh、礫浜Shingle、潟湖Lagoons/水路Ditchesなど生態学的生物生息地Habitatsの多様な特徴に応じて水鳥などを中心とした生物のネイチャー・リザーブとして再出発させた。

オーフォード・ネスのあるサフォークの海岸は、ナショナル・トラストが所有するようになる以前から「サフォークの海岸とヒース（荒地）'Suffolk Coast

and Heaths'」として顕著な自然美がみられる地域'Area of Outstanding Natural Beauty' (AONB)に1969年に指定されている(<http://www.landscapesforlife.org.uk/about-aonbs/visit-aonbs/suffolk-coast-and-heaths-aonb/>)。英国イースト・アングリア大学の歴史学者Tom Williamson (2005)によると「サフォークの海岸とヒース'Suffolk Coast and Heaths'」は、AONBに指定される以前から、SandlingsあるいはSandlandsと呼ばれて、海岸の砂地に自然美の認められる景勝地であった(Williamson 2005)。図1に示される通り、オーフォードのあるサフォークの海岸の周囲は、森林/牧草地Wood/Meadow、ヒースHeath、鳥Birds、ファーム・パークFarm Parkなどに関するネイチャー・リザーブが点在し、海岸線はヘリテージ・コーストHeritage Coastに指定されている。

次のIIでは、オーフォード・ネスの文化遺産について見学道に沿って紹介する。続いてIIIではナショナル・トラストが資産として所有しない決断をしたオーフォード・ネス灯台について考察する。IVでは、オーフォード・ネスを獲得して以降、ナショナル・トラストは、どのような方法でオーフォード・ネスを管理し、広報し、その文化的景観の特徴を人びとに展示しているのか概観する。Vでは、オーフォード・ネスにみられるように使用されなくなった老朽化された軍事施設などの近代化遺産を文化遺産としてどのように管理・展示するのか、修復などは積極的に行わず、自然化・廃墟化させるというオーフォード・ネスで実践されている文化遺産の管理をめぐる思想について先行研究を中心に紹介する。さらに、軍事利用されてきたオーフォード・ネスの土地の複雑な歴史と場所の記憶への人間の心情・情動・恐怖の感情の理解と表現をめぐるアーティストを招いての創作プロジェクトを導入しながら文化遺産の管理を行うナショナル・トラストの方法について紹介してまとめとする。

II オーフォード・ネスの文化遺産と見学道

オーフォード・ネスにある軍事施設の建築物と土地は、オーフォード・ネス・ナショナル・ネイチャー・リザーブとして1993年にナショナル・トラストの所有となった。ナショナル・トラスト刊行のオーフォード・ネスについてのガイドブックに掲載されているビジター・マップを見てみよう(図3)。

このマップには、3種類の見学道が示されているが、基本ルートは赤の見学道Red Trailである。そこ



図3 ナショナル・トラスト刊行のオーフォード・ネスについてのガイドブックに掲載されているビジター・マップ
(出典：National Trust (2018) *Orford Ness*, National Trust.)

で、赤の見学道の見学ポイントを順番にみていこう。これらの見学ポイントは、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦時代に建てられ使用された軍事施設が混在している。さらにナショナル・トラストの所有以降に導入された景観管理や生態系の利用方法についてもガイドブックには記されている。すべての見学者は、ナショナル・トラストの運行する渡し船に乗ってオーフォード・ネスの船着場Jettyに到着する。船着場が、オーフォード・ネス見学の出発点となる。

船着場から主な見学目的地までの距離については、インフォメーション・ビルディングInformation Buildingまでは約1km、ストニー水路Stony Ditchあたりまでは約2km、灯台Lighthouseまでは約3km、原子力兵器開発研究機関の実験室1 AWRE Laboratory 1までは3.5kmある。

赤の見学道Red Trailの見学ポイントについては、次のように1から40まで記されているので、順にたどってみよう。

1. 「新」湿地放牧地 'New' Grazing Marsh：ナショナル・トラストによる新しい管理のもと1993年から草地の自然再生がはかられている。
2. 川の堤防River Walls：12世紀（ヘンリー 2世の時

代）にまで遡ることができる。堤防はオー川の水が溢れて湿地の側に入ってくるのを止めるためにつくられた。高潮の時に、湿地が水に浸かるのを防ぎ、湿地を草地の方向へと生態系を変化させている。

3. 「古」湿地放牧地 'Old' Grazing Marsh：1994年にナショナル・トラストは牛の放牧を再導入した。1913年から1915年にかけて飛行場として造成され、軍事施設時代に飛行場として利用された土地を、1998年から2012年までかけて湿地の土と草を入れ替えて、新しい水路網を形成し、湿地放牧地として再生させた。
4. 飛行場のあった場所Airfield Site：1913年から飛行場として利用され1918年までに600人以上のスタッフがこの場所に住み、兵器の実験や開発をして働いていた。
5. インフォメーション・ビルディングInformation Building：1940年代に建てられた。1956年まで、原子力庁舎the Atomic Energy Authority Constabulary Stationと電話交換所がここにあった。現在はオーフォード・ネスの軍事施設としての歴史や自然保全の活動について展示する博物館となっている。
6. 第一次世界大戦時に利用した100フィート格納



図4 船着場からすぐの赤の見学道沿いに、羊が放牧される湿地放牧地に土地利用が転換された飛行場跡 Airfield site を見ることができる。遠景にオーフォードネス灯台、「黒色無線標識(ブラック・ビーコン)」などの特徴的な建造物を望むことができる。(2018年7月筆者撮影)



図5 鳥類に足輪をはめて実施する生態調査 Bird Ringing について説明するナショナル・トラストの看板。(2018年7月筆者撮影)

庫のあった場所Site of First World War 100ft span Hangar：第一次世界大戦の後半に建てられ当時開発していた大きな双発機を格納していたが、1950年代に屋根が壊れた後、取り壊された。

7. 無線方向探知/レーダーRadio Direction Finding/Radar：第一次世界大戦時に建てられた現存する数少ない建造物。第一次世界大戦時に建てられた建造物は一時的に利用するために仮設的に建てられたものが多いが、この建造物は、後の時代にも兵舎として、店として、レクリエーションの建物として目的を変えて利用された。現存しないが、隣にあった建物でロバート・ワトソン・ワットRobert Watson Watt (1892-1973) と彼の研究チームが無線方向探知機、後のレーダーをはじめて開発した。
8. 第一次大戦時の兵舎First World War Barracks：木材とセメントでつくられたtimber and cement-render 建物は第一次世界大戦時には86人が住む兵舎であったが、のちには倉庫として使われた。このタイプの建築では現存する数少ない建物の例のうちのひとつ。
9. 見晴台Viewing platform：ストニー水路Stony Ditchとその対岸にある原子力兵器研究開発機関Atomic Weapons Research Establishment (AWRE)のある礫浜を見渡すことができる。現在は、見晴台はバード・ウォッチングにも利用される。
10. 兵舎‘The Barracks’：1945年に建てられた建物であり、1999年に修復された。兵器実験をハイスピードカメラで撮影した映像の現像所として使

用された。1950年代半ばからは、電子工学の実験所と事務所electronics workshop and officeとして利用された。この建物は、爆発物処理班Bomb Disposal unitの拠点として1986年の最後まで使われていた。現在は、ボランティア・研究者・教育関係者の宿泊施設となっている。

11. レンジャー事務所Rangers’ Office：1945年に建てられた建物であり、この場所で使われる装置を作るための機械関係の店として使われた。1996年に改装してレンジャー事務所として使っている。
12. 第一次世界大戦時の格納庫First World War Hangar：1987年10月の嵐で被災して国防省によって取り壊された。第二次世界大戦時は、建物の屋内は作業場であり、屋外にはドイツ軍の飛行機の残骸が山のように積まれていて、利用できるものはリサイクルされていた。
13. 電池の充電店Battery Charging Shops：1940年に冷蔵施設として建てられた大きな建物である。1973年まで鉛蓄電池の店であった。それと同時に1941年からはより小さいアルカリ性蓄電池の充電室も併設した。現在は、鳥に足輪をつけて生態系調査をしている鳥類保護グループが使用している。
14. 「致死性と脆弱性」の試験場 ‘Lethality and Vulnerability’ Trials：1938年から1959年まで味方の飛行機の性能を上げるために、飛行機に向けての発砲実験が集中的に行われた場所である。
15. 湿地と礫浜の帯状分布Marsh-Shingle Zonation：海洋粘土と泥土がこの地点で礫浜と帯状に接す



図6 見学道の脇には、軍実験施設であった頃の遺物が蔓草に絡まり廃墟化され放置(「展示」)されている。看板の文字「危険 高電圧 Danger high voltage」が生々しい。(2018年7月筆者撮影)

る。ここでは、乾燥状態が優勢で、ウサギが跳ねまわるとような酸性草地在り発達している。ここではヒースランドheathlandに典型的なハリエンシダgorseのような植物が観察できる。

16. 「古」チャイニーズ・ウォール 'Old' Chinese Wall：第一次世界大戦中に飛行場を河川氾濫から守るために湿地につくられた堤防。中国人の労働供給とドイツ人の捕虜(王の湿地King Marshesに捕虜収容所があった)による労働力により堤防はつくられた。
17. 「新」チャイニーズ・ウォール 'New' Chinese Wall：1953年の大きな洪水の後で、飛行場を守るためにつくられた堤防。
18. 潟湖Lagoons：海水と淡水との混合の潟湖で、ほぼ人工による掘削によって潟湖を形成している。
19. 王の湿地King Marshes：オーフォード城を建立したヘンリー2世(1154-1189)の名から王の湿地と命名された。伝統的には湿地放牧地であった。1995年から家畜の放牧がおよそ60年ぶりに再導入された。
20. 「コブラ・ミスト」のあったサイト 'Cobra Mist' Site：ここには大きな灰色の建物があった。その中で、最重要機密のシステム441A、'Cobra Mist'として知られるan over-the-horizon(OTH)という後方散乱レーダーbackscatter radarシステム

の稼働が1960年代後半にはじまり1973年6月30日に終わった。ここは冷戦時代の米英国が共同で機密ミッションをいくつも行った場所である。

21. ベイリー橋Bailey Bridge：ストニー水路Stony Ditchを渡るための橋。ここにはじめて橋がかけられたのは17世紀に灯台へ行くためであった。現在の橋は1995年に架けられた。
22. ストニー水路Stony Ditch：1601年のJohn Nordenの地図にストニー水路はすでに載っている。この潮汐水路はオー川River Oreと1マイル下流で合流する。
23. 「黒色無線標識(ブラック・ビーコン)」'The Black Beacon'：この特徴的な建物は1928年に王立航空機関Royal Aircraft Establishment(RAE)によって実験的「回転ループrotating loop」のナビゲーション・ビーコンのために建てられた。のちには 原子力兵器研究開発機関Atomic Weapons Research Establishment (AWRE) が、爆撃実験の時には、「黒色無線標識」で遠隔計測telemetryを行なった。現在は、展示スペースと展望台となっている。
24. 発電所Power House：1933年に建てられて、「黒色無線標識」に電力を供給した。現在は、礫浜の地形学と自然史について展示している。
25. 原子力兵器研究開発機関のあった場所AWRE Site：1953年から1966年まで、原子力兵器研究開発機関が位置した礫浜。この礫浜には、実験室test cellsのある大きな建物が6棟つくられ、兵器の開発実験が行なわれた。AWREは、この礫浜で原子力兵器の与える振動、急激な温度変化、衝撃や加速度G forcesなどについて計測し、環境シミュレーションの実験を行なった。AWREは1971年に廃止された。
26. ハード・ターゲットThe 'Hard Target'：原子力兵器の実験において爆破の標的となるために1963年に建てられた強固な建造物。実験において爆破衝撃を計測するために利用された。現在は建物の基礎部分のみが残っている。
27. 制御室Control Room：1956年に建てられた。実験室1のための遠隔制御のできるセンター。
28. 実験室1 Laboratory 1：1956年に完成した建造物。原子力兵器のために最初に建てられた実験室のある建物。ここで英国ではじめての原爆「ブルー・ダニューブBlue Danube」の機械と振動・衝撃テストを実施した。軽いアルミニウム製の屋根は事故の時には吹き飛ばされるようにデザ



図7 「パゴタ 'Pagodas'」と呼ばれる重厚なコンクリート製の柱と特徴的な屋根を持つ原子力兵器実験棟をストニー水路 Stony Ditch の対岸から望遠で見る。(2018年7月筆者撮影)

インされていた。のちにつくられた実験棟4や5は、縦方向の衝撃に耐えられるように重厚なコンクリート製の柱と特徴的な屋根をつけていて、その形状から「パゴタ 'Pagodas'」と呼ばれている。

29. 警察塔 (ポリス・タワー) があった場所 Site of Police Tower : AWREのセキュリティー・ポリスが利用していた監視施設。海岸浸食により2012年に監視所は海の中へ崩落した。
30. オーフォード海岸 Orford Beach : 礫浜 shingle の海岸は生態学的にも貴重。
31. 北海 The North Sea : オーフォード・ネスの沿岸はコンテナ船や貨物船の航行ルートになっていて、船がひっきりなしに通過する。
32. 沿岸警備隊見張り台 Coastguard Lookout : 19世紀後半に沿岸警備隊の見張り台と宿舎ためにつくられた。第一次・二次世界大戦時にも沿岸警備のために使われた。1960年代初期には使われなくなった。現在は、この建物をヒメモリバトとモリバトが巣としている。
33. 海底電信ケーブル Submarine Telegraph Cable : 1853年6月30日に初めてイングランドとオランダを繋いだ海底ケーブル。
34. オーフォード・ネス灯台 Orford Ness Lighthouse : 1792年に Lord Braybrokeによって建てられた灯台。IIIで詳述する。
35. 灯台への道 Lighthouse Track : この道は灯台へ行くために200年以上にわたって使用されている。この砂草地は植生が豊かで、地衣類 lichens やコケ類、希少種のクローバーなどが生息している。爆破実験の行われていた場所であり、現在は織



図8 「爆弾弾道を計測するための建物 Bomb Ballistics Building」へ向かう見学道。見学道の両側には「植生のある礫浜 Vegetated Shingle」が観察できる。(2018年7月筆者撮影)

細な植生の見られる場所なので、道に沿って通り、道を踏みはずして歩かないようにとの指示がある。

36. 爆弾弾道を計測するための建物 Bomb Ballistics Building : 1933年に建てられた建物であり、この建物は「新しい」爆弾爆破実験の中核であった。建物の中には爆弾の弾道を計測記録する機械が備え付けられ、空気力学を改善させ爆弾照準を調整するためのデータを提供した。とくに1950年代には原爆開発のために実験データを計測し、大きな役割を果たした。現在は、建物の屋上から周りのネス(岬)の環境を見晴らすことができる。
 37. 植生のある礫浜 Vegetated Shingle : 礫浜の植生は、生態学的に最も重要な特徴を示す場所である。
 38. 潟湖と海堤防 Lagoon and Sea Wall : 「コブラ・ミスト」計画の場所を防御するために1960年代後半に人工的につくられた潟湖である。
 39. 礫浜の土手 Shingle Bank : 過去にはここに護岸工事により土手が人工的につくられ海からの水が侵食するのを防御していた。しかし1980年代に、国防省 (MOD) がこの方法を取りやめてから、自然の礫浜の機能を回復させるような管理を長年かけて実施している。
 40. 線路 Rail Tracks : 第一次世界大戦の時にオーフォード・ネスに物資を運ぶための狭軌の60cmゲージ軍用鉄道が敷設された。この鉄道は、ストニー水路をわたって敷設され物資を運んだ。
- 以上が、ナショナル・トラストによって示される

赤の見学道のルート上にあるオーフォード・ネスの文化遺産である。オーフォード・ネスを訪れ、見学道に沿って歩くことは、20世紀の軍事施設に関わる文化的遺物の廃墟化/遺産化のプロセスと湿地放牧地の再導入や鳥類の生息地の回復などの実践を通しての再自然化のプロセスを同時に観察することにつながる。さらに見学者は、科学と兵器実験場の関係の痕跡を観察しながら思考をめぐらすダーク・ツーリズムにも招かれている。

III オーフォード・ネス灯台：ナショナル・トラストが所有しない決断をした文化遺産

1913年以降オーフォード・ネスが軍事利用されるようになり、一般の人びとは立入禁止となるまでは、オーフォード・ネスの土地利用の歴史は、ネス(岬)の対岸に位置するオーフォード集落の歴史と重なっていた。

ヘンリー 2世(1133-1189)の治世する12世紀にオーフォードの高台に防御のための王城が築かれたのが集落としてのはじまりだとされ、集落は次第に港として賑わうようになったと記録される。オーフォードの港は、オーOre川の三角江estuaryに立地するが、河口には河川の運ぶ堆積物により湾口砂州や湿地が形成され、港には堆積物がつもり、次第に港としては機能なくなり、中世までには、港としては衰退した。13世紀になると、オーフォード・ネスは王の庇護のもとで村の生業のために共同利用されるようになった。オーフォード・ネスは湿地放牧地Grazing Marshとして利用されるようになり、湿地では水鳥猟wildfowlingや礫浜からポートを利用しての牡蠣漁や漁業が盛んとなった。

いっぽう、オーフォード・ネスは複雑な地形と浅瀬が多いことで沿岸を航行する船舶にとっては難所として有名であった。1627年の大嵐の時には32隻もの船がオーフォード・ネスで座礁した。このような出来事があったオーフォード・ネスに灯台を建造することが望まれた(National Trust 2018)

はじめの灯台は木製で1637年に建造された。この木製灯台は、1780年に遠方を照らす‘high light’と沿岸を照らす‘low light’の1対のレンガ製塔の灯台に替えられた。1対のうちの‘low light’の灯台は、12年後1792年に海岸浸食によって海へと倒壊してしまった。次に建てられたのがWilliam Wilkinsが設計し、地主Lord Braybrookeが1792年に新しく建造した灯台である。現在(2020年)も、この灯台は、そこに

建っていて、イングリッシュ・ヘリテージによってGrade IIに登録されている歴史的建造物である。灯台を設計したWilliam Wilkinsはロンドンのナショナル・ギャラリーを設計した同名のWilliam Wilkinsの父である。倒壊せずに残ったレンガ製の1780年に建てられた‘high light’の灯台が今度は‘low light’の役割を果たし、1792年に新しく建てられた灯台が‘high light’の役割を果たした。しかしながら、レンガ製の1780年に建てられた‘low light’の役割を果たしていた灯台も1887年に海岸浸食のために海に倒壊した。今でも、この倒壊した灯台の基礎部分を、現在の灯台の上から、干潮のときに見ることができると語られる。それ以後、‘low light’の灯台は建てられることはなく、代わりに1888年に赤色灯と緑色灯を‘high light’に加えることで‘low light’の役割を果たした。さらに1914年には新しいrevolving opticが搭載され以降99年間使用された。1959年には、灯台は電氣化され、1964年には、自動化された初めての灯台のひとつとなった。そこで翌年には、灯台守も廃止された。

1792年に建造されてから、私有であったオーフォード・ネスの灯台は、英国沿岸の灯台を管理する機関トリニティ・ハウスTrinity Houseに1837年に移管された。オーフォード・ネスの灯台は、1837年以降トリニティ・ハウスが一貫して管理運営していた。1913年から1980年代まで、オーフォード・ネスが国防省による管理のもと軍事利用されている間も灯台はトリニティ・ハウスが管理していた。軍関係者以外で例外的にオーフォード・ネスにアクセスできる灯台に住む灯台守の家族は、第二次世界大戦の開戦の数日前まで北海に向かって前線である灯台に住んでいたという。灯台守の子どもたちは、灯台への道Lighthouse Trackを通り毎日オーフォード集落にある学校まで通ったと伝えられる。

トリニティ・ハウスはオーフォード・ネス灯台を引き継いで以来170年余り灯台を管理運営したが、2013年6月27日に灯台を廃止すると決断した。理由は灯台に「海が迫っている‘the encroaching sea.’」(<http://www.orfordnesslighthouse.co.uk/history/> 2019年11月20日閲覧) からだと語られる。サフォークの海岸に建つ人工物の灯台は海岸侵食の自然の力には抗えない。数年のうちに必ず到来する灯台が海に落ちる日に備えて2013年には灯台から「電氣装置と有害物質(水銀)は取り除かれた」。また、オーフォード・ネス灯台廃止にともない、近隣のサズウォルド灯台Southwold Lighthouseの光を増量してその不足を補うと宣言された。

灯台としては役割を終えたオーフォード・ネス灯台をトリニティ・ハウスは、ナショナル・トラストに無料で譲渡すると2012年に申し出た。しかしながら、ナショナル・トラストはトリニティ・ハウスのこの申し出を却下した。理由は、いずれ近いうちに必ず海岸浸食によって海に倒壊することになる灯台は、文化遺産として適切に管理して、一般公開することができないと判断されたからだ(<http://www.orfordnesslighthouse.co.uk/about-the-trust/the-lighthouse-the-national-trust/> 2019年11月20日閲覧)。そこで、代替案として、あらたに創設されたOrfordness Lighthouse Company Limitedが2013年9月に灯台を取得して、ただちにOrfordness Lighthouse Trustを創設して灯台を譲渡した。Orfordness Lighthouse Trustは、灯台の内部についても、特定日に一般公開をしながら管理運営をすることとなった。Orfordness Lighthouse Trustのホームページによるとこの経緯について次のように記される：

Trinity House had offered the Lighthouse to the National Trust for nothing; but the latter declined to take it on. The National Trust believed the final solution for the Lighthouse should be one of “controlled ruination” with visitors to the Ness limited to seeing the exterior only until the fateful day arrived. The Orfordness Lighthouse Company Limited was therefore formed to make the acquisition and to allow visitors greater access. (<http://www.orfordnesslighthouse.co.uk/about-the-trust/the-lighthouse-the-national-trust/> 2019年11月21日閲覧)

問題は、灯台が海に倒壊する日が来るまで、どのように文化遺産として灯台を管理するのかという意見の違いである。ナショナル・トラストは、修復などの手を加えずに管理しながら廃墟化させるという“controlled ruination”の手法をとり、灯台の内部についても、手を加えず、見学は外からのみであるという方針を提示した。ナショナル・トラストがとるのは、いずれ近いうちに海に沈む灯台であるから、なるべく文化遺産管理に資金をかけず自然に任せるという考え方であり、灯台の所有についても却下する。いっぽう、灯台を取得したOrfordness Lighthouse Trustは、灯台が海に沈む日まで、文化遺産として手厚く管理し続け、基金を募り、ホームページで情報を発信し、特定日にオープン・ディを設け入場料を徴収しながら一般公開を行っている。

ところで2013年から2014年の冬の間、海岸は10メートルも浸食されたと伝えられる。Orfordness



図9 灯台への道 Lighthouse Track から見たオーフォード・ネス灯台。2019年9月29日未明に起こった高潮と嵐によって、灯台のすぐ横にあるバンガローは倒壊したと伝えられる。写真には、灯台の向こうに北海を航行する船舶が見える。(2018年7月筆者撮影)

Lighthouse Trustは、灯台に迫る海岸侵食を食い止める方法として、地域のボランティアによる協力のもとで土嚢(the Geo-Textile “sausages”)を積み上げ、灯台の基礎を補強した。オーフォード・ネスは、a site of Special Scientific Interest (SSSI) に指定されているため、人工的な護岸工事などで恒久的に地形を変えることは、現在は許されておらず、土嚢を積むなどの一時的な処置のみが可能となっている。

特に2019年になって英国放送協会BBCのサフォーク地方ニュースでは、オーフォード・ネス灯台に近づく海岸浸食による建物の被害が継続的に報道されている。

Orfordness Lighthouse Trustのホームページによる2019年9月30日にアップされた情報によると、9月28日から29日未明に起こった強風による高潮と嵐によって、灯台のすぐ横にあるバンガローが倒壊したことを写真とともに報じている (<http://www.orfordnesslighthouse.co.uk> 2019年11月21日閲覧)。オーフォード・ネス灯台の土台はしっかりしているからまだ大丈夫だと伝えられる。しかしながら、オーフォード・ネス灯台が海岸侵食により海に崩落する日は迫っている。

IV ナショナル・トラストによるオーフォード・ネスについての広報と景観管理

ここではナショナル・トラストがオーフォード・ネスを獲得して以降、どのような方法で広報し、管理してきたのか概観する。ナショナル・トラストの

2018年度版のハンドブックでは、オーフォード・ネス・ナショナル・ネイチャー・リザーブは、次のように記述されている。

This is Suffolk's secret coast, only reached by National Trust ferry. Wild, remote and exposed, the 'island' contains the ruined remnants of a disturbing past. Ranked among the most important shingle features in the world, rare and fragile wildlife thrives where weapons, including atomic bombs, were once tested and perfected.

(National Trust 2018: 227-228)

以上の内容をまとめると：

- a) オーフォード・ネスは、サフォークにある秘密の海岸であり、ナショナル・トラストの渡し舟のボートでのみ上陸できる。
- b) 周囲から隔絶されたワイルドで剥き出しの「島」には、心をかき乱されるような過去の遺物の廃墟が含まれる。
- c) 世界的に見ても一番に価値づけられるような礫浜shingleには、希少で脆弱なワイルドライフを観察することができる。その礫浜は、過去の一時期には軍によって原子爆弾を含む様々な武器をテストする実験場として使用された歴史がある。

(National Trust 2018: 227-228)

先に述べたように、ナショナル・トラストがオーフォード・ネスの土地を獲得したのは1993年であり、1995年6月から一般公開をはじめた。ナショナル・トラストのガイドブックではオーフォード・ネスは、「人々がアクセスしづらい地理的な隔絶性と場所の持つアウラの醸し出す魅力との間でちょうどよいバランスを達成しているので、見学者数をうまくコントロールすることができる」と分析している(National Trust 2018: 23)。

オーフォード・ネスの隔絶性とは、ナショナル・トラストの所有する小型の渡し舟のボートでのみアプローチできる「島」であることから生まれる。オーフォードの村の船着場からオーフォード・ネスまでは、ボートに乗ると10分程度で着く。ナショナル・トラストのボートは、3月から10月まで、午前10時から午後2時までの間に20分おきに運行する。ボートには15人という定員があり、チケットは、予約制ではなく当日の朝に来場した人だけにのみ発売される。したがってオーフォード・ネスへのアクセス数は最大でも1日180人に限定される。ナショナル・トラストの会員になればほぼすべてのナショナル・トラ

ストの資産を無料で見学できることになっているが、オーフォード・ネスでは、会員であっても、ボートのチケットは有料である。風雨が強い日、濃霧の日にはボートは運休されるため、見学は自然条件に大きく左右される。

ナショナル・トラストが示唆するオーフォード・ネスが持つアウラのある魅力とは何か、この場所独特の特徴と歴史についてナショナル・トラストがどのように広報しているのかを理解するためにオーフォード・ネスについてのガイドブックの表紙のイラストを手がかりとしてみてみよう。

表紙には鮮やかな青、緑、黄、白、黒でカラフルな洗練されたイラストが描かれる。表紙の上側中央部に黄色の長方形が配され、ナショナル・トラストのオークの葉とどんぐりのロゴマークが上部に描かれNational Trust Orford Nessとのタイトルが黒字で記される。上半分は空の色の青地に塗られ、左上に白抜き雲と手前に緑と黒でプロペラ機(戦闘機)が描かれる。右下の青空には、黒色の海鳥がV字の隊列を組んで飛んでいる遠景が描かれる。真ん中の左右帯状に黄色で礫浜の土地が描かれる。黄色の土地の上に、黒で2棟のパゴタと呼ばれる特徴的な核兵器実験施設の建造物が描かれる。パゴタと呼ばれる建物は、兵器の爆発の実験にも耐えられるように屋根に回廊のような覆いのつけられた独特な形態の建造物である。パゴタの建つ黄色の土地の帯の手前には平行に少し太い緑の帯が川の流れとして描かれ、白抜きで3本の波線が動きをもって描かれる。緑の帯の手前(下側)は、黄色の帯が下まで描かれる。緑の川の手前には黒で植物の植生と鉄条網が描かれ、黄色の土地には小石が斜めにいくつもリズムカルに描かれる。右下のコーナーには海鳥のアジサシLittle Tern *Sterna albifrons*が中央部に嘴を向けて羽を広げて飛んだ状態で大きく描かれる。左下には、EUの旗の星が輪になって円をつくっている真ん中にLifeと描かれたマークが示され、旗の下にSupported by the EU Life-Nature programmeとスポンサーが記される。

この表紙のイラストには、オーフォード・ネスの魅力を形成する主なアクターが描かれている。1913年から1985年の軍の兵器実験施設時代の歴史的な記憶を示すものとしてプロペラ飛行機(戦闘機)とパゴタと呼ばれる建造物群、鉄条網、さらに1993年にナショナル・トラストに譲渡されてからは野鳥の観察地として自然化させるプロジェクトをはじめたことを象徴的に示すようにアジサシと湿地の植生が描かれる。スポンサーとしてEUのLife-Nature programme

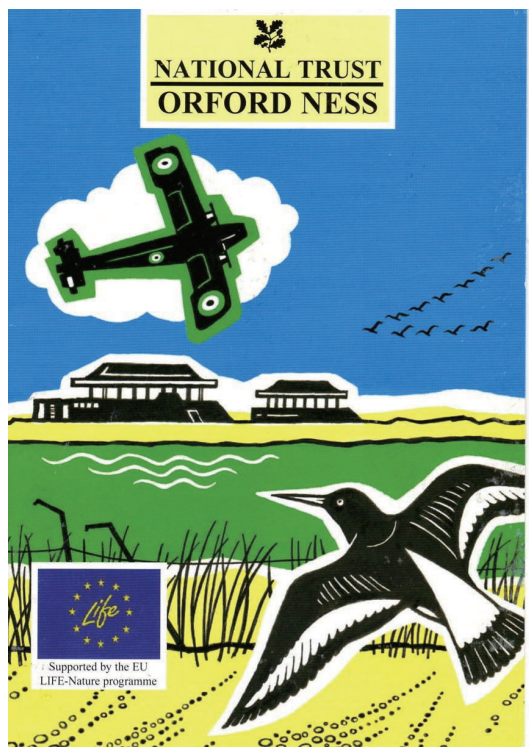


図10 ナショナル・トラスト刊行のオーフォード・ネスについてのガイドブックの表紙の図像。(出典:National Trust (2018) Orford Ness. National Trust.)

のタイトルも表紙に記される。オーフォード・ネスの魅力を形成するアクターを考えると、ナショナル・トラストの所有としなかったオーフォード・ネス灯台は表紙のイラストから排除されている。

この表紙のイラストと見学者のためのビジター・マップ(図3)を重ねあわせてみよう。表紙のイラストは、ストニー水路Stony Ditchの手前(西側)から東側に向かって、パゴタの建つ核兵器実験施設(AWRE)の方角を描いている。この表紙のイラストは、オーフォード・ネスの魅力について空間的整合性をもって描いている。

オーフォード・ネスの特徴的な生態系Habitatsである放牧湿地Grazing Marsh、塩水性湿地Saltmarsh、礫浜Shingle、潟湖/水路Lagoons/Ditchesの4種類も、表紙のイラストには描かれている。

表紙には、EUのLife-Nature programmeの資金援助を受けて景観管理運営をしていることが示されている。このLife-Nature programmeは、ナショナル・トラストがオーフォード・ネスを入手した1993年の1年後の1994年に申請され、プロジェクトの第一段階Life1: The Conservation of Orford Nessが開始した。

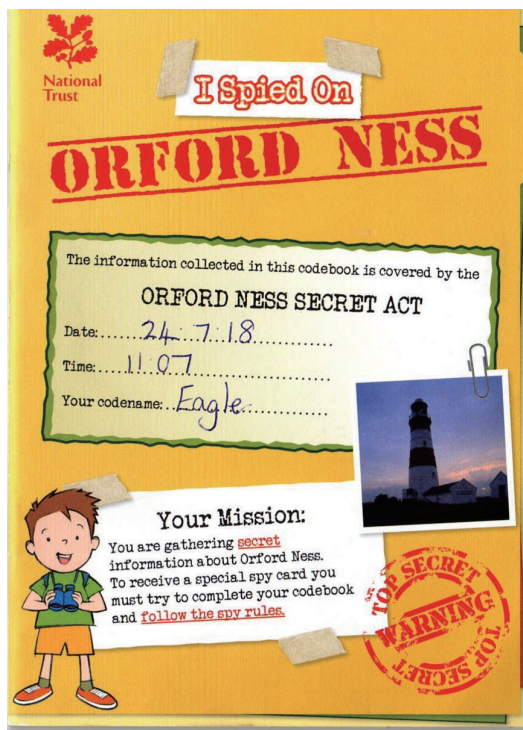


図11 子ども用のガイドブック『私はオーフォード・ネスでスパイ活動をする I Spied on Orford Ness』の表紙の図像。(出典: National Trust (nd) I Spied on Orford Ness. National Trust.)

1997年から2010年までは、第二段階のプロジェクト Life2: Wild Ness The Orford Ness Project Second Phase が始まった。さらに第三段階のプロジェクト Life+ Alde- Ore Future for Wildlife project は、2010年から2014年の期間、オーフォード・ネスだけではなく、その北部にある集落オールドバラを流れるオールド川にまで地域が拡大され、サフォーク・コーストのワイルドライフの未来像を見据えて進められた。このプロジェクトは、第一段階の自然を「保全する」という視点から、第二段階では「ワイルドWild Ness」、第三段階では「ワイルドライフWildlife」を新たに導入することによって、自然を再創造するという視点へと発展している。

いっぽう、ナショナル・トラストでは、若い世代にもナショナル・トラストの歴史文化遺産の魅力について広報し、子どものうちからその価値について楽しみながら理解でき、学べるような教材の開発に力を注いでいる(橘 2013など)。オーフォード・ネスでも、子どもが楽しみながら観察して学べるガイドブック『私はオーフォード・ネスでスパイ活動をする I Spied on Orford Ness』を刊行している。こ

のガイドブックはスパイの「コードブックcodebook」となっており、これに沿って、オーフォード・ネスを観察して、問題を解いて「シークレット情報secret information」を、入手していくと、「特別スパイカードa special spy card」が景品としてもらえるという仕組みとなっている。このガイドブックの表紙には、オーフォード・ネス灯台の写真が描かれている。オーフォード・ネス灯台は、先述したように、現在ナショナル・トラストの資産ではない。しかしながら、オーフォード・ネスを語るときには、視覚的に力を持って訴えるランドマークとなっている。

V 軍事利用されてきたオーフォード・ネスの土地の 20 世紀の歴史と場所の記憶へのアプローチをめぐる

本章では、オーフォード・ネスの文化遺産は、今まで、どのように記録・研究されてきたのか、多様な視点を提示して、本稿のまとめとしよう。

文化地理学的な視点からオーフォード・ネスにアプローチしたのはSophia Davisである。Davisは2006年に「軍事景観：オーフォード・ネスにおける科学的廃墟と冷戦時代のモニュメント'Military landscapes: Scientific ruins and Cold War monuments at Orford Ness'」と題する M.Phil 論文をケンブリッジ大学に提出した。続いて2008年には*Cultural Geographies*誌のCultural geographies in practiceに「軍事景観とシークレット・サイエンス：オーフォード・ネスのケース'Military landscapes and secret science: the case of Orford Ness'」と題する論文の中で、どのようにオーフォード・ネスの軍事景観を評価して、将来どのように文化遺産として管理し展示するのか実践的に考察した。

近現代の軍事遺産について多数の著書のあるWayne CocroftとMagnus Alexanderは、2009年に『サフォーク州オーフォード・ネスの原子力兵器研究開発機関Atomic Weapons Research Establishment, Orford Ness, Suffolk: Cold War Research and Development Site: Survey Report.』をイングリッシュ・ヘリテージEnglish Heritageから刊行した。イングリッシュ・ヘリテージは、イングランドの歴史的建造物を保全する目的で英国政府により設立された公的な組織である。本書は、著者らが、オーフォード・ネスにある全ての建築物について2007年6月を中心に、調査・記録したと記される。本書の副題として冷戦時代の軍事研究開発事業とあるように、冷戦時代の



図12 Wayne Cocroft and Magnus Alexander (2009) *Atomic Weapons Research Establishment, Orford Ness, Suffolk: Cold War Research and Development Site: Survey Report*. English Heritage の表紙

1956年から1972年までオーフォード・ネスで稼働した原子力兵器研究開発機関Atomic Weapons Research Establishment (AWRE) に焦点を当ながら1913年からはじまったオーフォード・ネスの軍事利用の歴史について現存する全ての建物をリスト化して当時の利用方法について考古学調査の手法で記録した。本書によると、オーフォードネスの軍事利用史の段階は「第一次世界大戦、初期レーダー研究時代Early radar research、第二次世界大戦、戦後爆弾弾道計測の時代Post-war bomb ballistics、原子力兵器研究開発機関1956-1972 Atomic Weapons Research Establishment 1956-1972、1958年の米英間の共同防衛協定の時代The 1958 Mutual Defence Agreement and its consequences、1960年代The 1960s、米英間で行われた441計画-コブラ・ミスト時代Project 441-L Cobra Mist、オーフォードネスの軍事基地の終焉Closure of AWRE Orford Ness」(Cocroft and Alexander 2009)と推移する。

オーフォード・ネスの礫浜の海岸に位置するAWREのあった場所には6つの大きなテストセルtest cellsの建造物があつた。とくに実験棟4や5は、縦方向の衝撃に耐えられるように重厚なコンクリート製の柱と特徴的な屋根をつけていて、その形状から「パゴダ'Pagodas'」と呼ばれた。この「パゴダ」は対岸からも望むことのできるようなオーフォード・ネスのランドマークとなっていて、「ここで科学と

政治が出会い原子力兵器を開発して所有することで英国の政治的防衛力を高めた」(Cocroft and Alexander 2009)と信じられている場所だと記される。

前著と同年の2009年にイングリッシュ・ヘリテージとEUによる文化的プロジェクトCulture 2000: Education and Cultureと共同で刊行されたのは、Neil Forbesらの編集による『ヨーロッパの死の世紀: 20世紀の衝突する遺産への視座*Europe's Deadly Century: Perspectives on 20th century Conflict Heritage*』である。本書は「戦争の景観*Landscape of War*」という副題がついている。そこに所収されたのがAngus Wainwrightによる「オーフォード・ネス: 衝突する景観? Orford Ness: A landscape in conflict?」である。本論文では、オーフォード・ネスの軍事景観について「どのような保全の方法があり、文化遺産としてどのように記憶して展示するのか (A case for preservation?)」(Wainwright 2009)、同時にオーフォード・ネスの「自然的・生態学的に希少なハビタをどのように回復・再導入するのか (More than a rare habitat)」(Wainwright 2009)という問題提起を明確に行った。本論文では、オーフォード・ネスの全体をいくつかの領域に分け、見学者に何を見るように提示するのかについて「歴史的関心と自然の審美眼」に同時に訴えるような景観管理計画案を示した。

英国エクセター大学の文化地理学者のCaitlin Desilveyは、『キュレート (収集展示) される崩壊: 救済のむこうにあるヘリテージ (遺産) *Curated Decay: Heritage Beyond Saving*』(2017) という著書のなかの4章で「秩序ある崩壊 (廃墟化): 不介入 (放任) の哲学 4 Orderly Decay: Philosophies of Nonintervention」という表題のもとでオーフォード・ネスの軍事利用された資産の遺産化/廃墟化への動態について論じている。Desilvey は、未来へ開かれた視点から、物質の遺産化/廃墟化の動態に対して「不介入という思想」を語る。さらに、OlsenとPetursdottirの編集する『廃墟の記憶: 物質性、審美性、そして近過去についての考古学*Ruin Memories: Materialities, Aesthetics and the Archaeology of the Recent Past*』というタイトルの論文集のなかで、Desilveyが、オーフォード・ネスの軍事遺産の景観管理についてキュレーターとしての視点から提案するのは、建造物などの保全について、人工的に手をかけるのではなく、なるべく自然にともなう廃墟化を見守るような「緩和的キュレーション: オーフォード・ネスをめぐるアートとエントロピー'*Palliative curation: Art and entropy on Orford Ness*」(Desilvey 2014) という方法である。それは、オーフォード・ネス灯台のナショナル・トラスト

の文化遺産管理方法として指摘された「管理しながら廃墟化させる“controlled ruination”」方法でもある。これは英国で18世紀以来の伝統である廃墟に対するビクチャレスク美学の21世紀的な展開といえよう。

現在、オーフォード・ネスで実践されている現存する建造物の文化遺産としての管理方法は:

- a) 博物館などに転換し展示の場や展望台として利用している建造物: IIの5インフォメーション・ビルディング、23「黒色無線標識」、24「発電所」、36「爆弾弾道を計測するための建物」など
- b) 自然保全に関わるレンジャーや研究者の滞在基地や鳥類の生態調査基地などに再利用されている建造物: IIの10兵舎や11レンジャー事務所など
- c) 修復など大掛かりには行わず、廃墟化に向かっている建造物: IIの28 AWREの実験棟などの3種類に分類できる。特にc)に分類できる建造物の中への見学者の自由なアクセスは、倒壊などの危険もあることから通常は制限されている。しかしながら、ナショナル・トラストは、廃墟建造物の写真撮影会などの特別見学会を年に数回、ホームページから募集している。このようなツアーは人気が高く、参加人数も制限されているので、募集されるとすぐに満席になってしまう。

ナショナル・トラストでは、オーフォード・ネスは、冷戦時代まで、軍関係者の労働の場所であったという記憶の掘り起こしの試みも行っている。オーフォード・ネスで働いていた科学者などの労働者の記念碑を建てるプロジェクトや、当事者からのオーラル・ヒストリーの収集も行われている。

さらに、ナショナル・トラストでは軍事利用されてきたオーフォード・ネスの土地の複雑な歴史と場所の記憶への人間の心情・情動・恐怖の感情の理解と表現をめぐるアーティストを招いての創作プロジェクトを導入しながら文化遺産のマネージメントを推進している。ナショナル・トラストでは、オーフォード・ネスの複雑な歴史をアート作品として表現する活動を支援している。

英国キングストン大学の芸術史学者Flinthamは、展望論文「軍事-牧歌複合体: 景観における軍事主義の現代的表象'*The military-pastoral complex: contemporary representations of militarism in the landscape*」をテート美術館が発行している*Tate Papers* 17 (2012)に掲載している。Flinthamは、現代アートにおける軍事景観の表象について論じているこの論文のなかでオーフォード・ネスを舞台とした作品を取り上げている。それは、Louise K. Wilsonによる*A Record of*

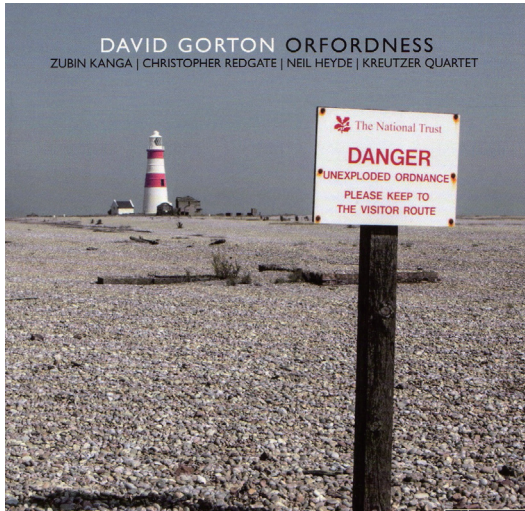


図13 オーフォード・ネスの複雑な歴史を作曲家David Gortonは5楽章の音楽作品 *Orfordness* に結実させた。写真は同CDの表紙（出典：David Gorton (2014) *Orfordness*. Divine Art Ltd.）

*Fear*という表題で知られるパフォーマンスやアートワークスから構成される作品集であり、2005年にオーフォード・ネスを舞台に演じられた (Flintham 2012)。その作品では、オーフォード・ネスのAtomic Weapons Research Establishment跡地でサウンドスケープが録音され作品に使われ、前-核兵器時代の無邪気さan age of pre-nuclear innocenceから核兵器時代へ移ったことへの嘆き、不安、悲しみなどの情動がパフォーマンス・アート作品として表現された。

1978年生まれの作曲家David Gortonは、オーフォード・ネスの複雑な歴史を5楽章から構成される音楽作品 *Orfordness* に結晶させた (Gorton 2014)。CDに付属しているMichael Hooperによるライナーノーツには、この5楽章の音楽作品は「センセーショナルな(陰謀)説の一つone of sensational (conspiracy) theories」を題材としてオーフォード・ネス歴史物語を描いていると解説する。第1楽章から第5楽章までのタイトルは：

第1楽章：「サフォーク州のシングル・ストリート集落からの民間人の脱出‘Evacuation of the Civil Population from Shingle Street, Suffolk’」

第2楽章：「コブラ・ミスト(冷戦時代の後方散乱レーダーの実験場) ‘Cobra Mist’, named after an over-the-horizon radar system」(本稿のIIの20で紹介)

第3楽章：「あなたは人々に喋ってはならない‘You Can’t Tell The People’」

第4楽章：「ブルー・ダニューブ(オーフォード・ネスで実験された原爆の名称)‘Blue Danube’」

第5楽章：「島‘The Island’」

以上の5楽章の表題は、そのままオーフォード・ネスの軍事利用の歴史となっている。第5楽章で、ようやく平和な「島」を取り戻すまでの軍事史が描かれている。この音楽作品には、オーフォード・ネスの周辺の集落到に住む人々が共通して抱いていたであろうオーフォード・ネスでは何が行われているのか明らかにされてこなかったことへの恐れや不安といった複雑な感情にアプローチしている。

とくに第1楽章のテーマとなっている集落シングル・ストリートについては、イースト・アングリア大学の文学教授で作家のW.G.ゼーバルト (1944-2001) による紀行文学『土星の環』(原著は1995年刊行)の記述を合わせて読むとより理解が深まる。シングル・ストリート集落はオーフォード集落の南に位置し、オーフォード・ネスの岬の南の突端の対岸にある。

ゼーバルトは、紀行文学『土星の環』のなかで、ナショナル・トラストに譲渡される直前の1992年にオーフォード・ネスを訪れている。ゼーバルトは、シングル・ストリート村の噂について「〈サフォーク州シングル・ストリート村住民の避難について〉と題された文書が国防省の書庫に保管」されており「シングル・ストリート村で過去に起こった、今日なお一般に開示をはばかれる身の毛のよだつような事故の記述」(ゼーバルト 2007: 218)が含まれるというのだと説明する。さらに、彼はなぜこのような噂が起こったのかについて次のように分析する。

シングル・ストリート村のような噂が根強くはびこった一因は、冷戦時代に国防省がサフォーク州の沿岸に秘密兵器研究所なるものを置いており、そこで行われていたことに箝口令が敷かれていたからでもあった。たとえばオーフォードの住民は、オーフォードネスに点在する研究施設でいったいなにが行われているか、想像をたくましくするしかなかったのである。村から目と鼻の先にありながら、そこはネヴァダ砂漠や南太平洋の岩礁ほど遠いところにあったのだ(ゼーバルト 2007: 219)。

ところで英国の音楽愛好者たちにとっては、オー

フォード・ネスの近隣のサフォーク海岸線は、現代音楽作曲家のベンジャミン・ブリテン(1913-1976)が生まれ、生涯ほとんどを過ごしたことで知られる音楽の聖地である。ブリテンは、1913年にサフォーク州の港町ローストフトで生まれ、近隣のオールドバラの海に見える家に移り住んだ。後には、オールドバラより内陸のスネイプに居を構え、作曲活動のスタジオとした(マシューズ 2013)。

ブリテンは、音楽家として教育を受け、作曲家として成功し、ロンドン、パリ、ニューヨークなど世界で活躍するいっぽう、故郷のサフォーク州を拠点とした音楽活動も大切にしていた。マシューズによるブリテンの伝記を参照すると、戦後1948年、ブリテン35歳のとき第1回オールドバラ音楽祭を教区の教会を会場にして開催して以降、ブリテンがプロデュースしたホールに場所を変えながら、現在に至るまで、オールドバラでは毎年音楽祭が開かれていて、オールドバラは音楽の街として有名になった(マシューズ 2013)。

このオールドバラ集落からすぐ南に位置するオーフォード・ネスの軍事利用は、ブリテンが生まれたのと同年の1913年から開始された。したがってブリテンがサフォーク海岸近隣で生活していた1976年までの生涯の間、オーフォード・ネスは常に軍事利用されていたことになる。

ブリテンは、成長すると、徹底した平和主義者となり1942年29歳の時、良心的兵役拒否者として兵役を免除された。音楽作品としても1962年に『戦争レクイエム Op.66 *War Requiem*』を発表して、戦争被害を受け再建されたコヴェントリー大聖堂で初演している。

オーフォード・ネスの軍事兵器研究開発機関のことを、ブリテンが、どのように思っていたのか管見の限り語っていない。当時は軍事機密であったので、そこで何が行われていたのかは、先に見た通り公表されておらず、彼が語ることもなかったであろう。しかしながら、対岸のオーフォード集落の高台からは、オーフォード・ネスは見渡すことのできる距離にあった。

ブリテンは、オーフォード集落の子どもたちなどの素人もプロと一緒に出演したシアター・ピース『ノアの洪水 Op.59 *Noye's Fludde*』を作曲し、1958年、オーフォードにある聖バーソロミュー教区教会にて初演した。ブリテンによる作曲と初演はオールドバラ音楽祭の一環でもあった。

オーフォード集落でブリテンの『ノアの洪水』が初演された1958年は、オーフォード・ネスでは、ちょ



図14 ブリテンのシアター・ピース『ノアの洪水 Op.59 *Noye's Fludde* (初演 1958)』の初演50周年を記念して、ブリテン・ピアーズ財団からオーフォードの聖バーソロミュー教区教会に寄贈された Liliane Yauner 作のノアとオリーブの枝をくわえた鳩の彫刻 (2018年7月筆者撮影)

うど原子力兵器研究開発機関AWRE稼働の全盛期であり、実験棟で原爆実験を実施していた時代と重なる。ブリテンが作曲し、オーフォードで初演した『ノアの洪水』は、旧約聖書にあるこの世の滅亡と再生の物語である。ブリテンは、オーフォード・ネスで行なっているであろうことについては、何も語っていないが、このタイミングで、オーフォード集落で初演をすることは、冷戦時代に人類が共通して抱えていた情動や不安の表現、さらには作家ゼーバルトが投げかけたメッセージとも通底しているのではないだろうか。

『ノアの洪水 Op.59 *Noye's Fludde*』初演50周年を記念して、ブリテン・ピアーズ財団からオーフォード集落の聖バーソロミュー教区教会に寄贈された Liliane Yauner 作のノアの彫刻を現在、ブリテンの作品初演の痕跡として見るができる。

ナショナル・トラストではオーフォード・ネスに毎年アーティストを招いて、滞在して作品を製作してもらおうプロジェクトを推進しているが、それらの作品はオールドバラ音楽祭の一環としても展示されている。2014年は第一次世界大戦がはじまって100周年を迎え、英国では当時を回顧する展示の流れがあった(橘 2017など)。このような潮流のなか

2014年にナショナル・トラストによってオーフォード・ネスに招かれたのはスコットランド生まれのアーティストAnya Gallaccioであった。彼女は、オーフォード・ネスの礫浜から採取した有機素材物を爆縮させ板状のオブジェを造った。いっぽう第一次世界大戦中、英国の王立陸軍航空隊Royal Flying Corpsはオーフォード・ネスにて航空機からの爆撃と写真撮影の実験を繰り返し行っていた。そのようにしてオーフォード・ネスが撮影された当時の航空写真をGallaccioは帝国戦争博物館のアーカイブスから取り寄せた。彼女は、爆縮させた有機素材で造られた板状のオブジェと航空写真の画像を融合させたインスタレーション作品を創作し、2014年6月にオーフォード・ネス会場とオールドバラ音楽祭のSNAPヴィジュアル・アート会場の2ヶ所で展示した。Gallaccioによる作品はオーフォード・ネスの軍事利用の景観を表象し、戦争による破壊と破滅の悲惨な記憶を人間の情動に訴えとともに、礫浜の爆縮された有機素材物を使用することで、礫浜の自然も常に変化していく動態にあることを表現している (<https://www.suffolkmag.co.uk/home/coming-up-at-this-year-s-aldeburgh-festival-1-3614358>, <https://www.nationaltrust.org.uk/orford-ness-national-nature-reserve/features/snap--art-at-the-aldeburgh-festival> 2020年1月10日閲覧)。

ナショナル・トラストがオーフォード・ネスで実践しているのは、アーティストのインスピレーションや多様な表現によって照射されながら実験的に探求する景観管理の方法でもある。ナショナル・トラストがオーフォード・ネスで目指しているのは、アーティストの表現の聖地かもしれない。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金(課題番号17H02430)による成果の一部です。筆者は、本稿執筆にあたってご協力をいただきましたDr Ben Cowell (Director General, Historic House Association)に感謝いたします。またJulie、Reuben、Tobyにも感謝いたします。

参考文献

- Carver, Martin (2017) *The Sutton Hoo Story: Encounters with Early England*. The Boydell Press.
- Caton, Peter (2015) *Suffolk Coast Walk*. Matador.
- Cocroft, Wayne and Magnus Alexander (2009) *Atomic Weapons Research Establishment, Orford Ness, Suffolk: Cold War Research and Development Site: Survey Report*. English Heritage.
- Daniels, Stephen; Cowell, Ben and Veale, Lucy (2015) *Landscapes of the National Trust*. National Trust.
- Davis, Sophia (2006) 'Military landscapes: Scientific ruins and Cold War monuments at Orford Ness' Unpublished M.Phil thesis, University of Cambridge.
- Davis, Sophia (2008) 'Military landscapes and secret science: the case of Orford Ness' (Cultural geographies in practice). *Cultural Geographies*, 15-1, pp.143-149, Sage Publications.
- Desilvey, Caitlin (2017) *Curated Decay: Heritage Beyond Saving*. University of Minnesota Press.
- Desilvey, Caitlin (2014) 'Palliative curation: Art and entropy on Orford Ness' in Olsen, B and Petersdottir, D. (2014) *Ruin Memories: Materialities, Aesthetics and the Archaeology of the Recent Past*. Routledge.
- Flintham, M.(2012) 'The military-pastoral complex: contemporary representations of militarism in the landscape', *Tate Papers* 17.
- Gorton, David (2014) *Orfordness*. Divine Art Ltd.
- Hooper, Michael (2014) 'The Music' in Gorton, David (2014) *Orfordness*. Divine Art Ltd.
- Heazell, Paddy (2010) *Most Secret: the Hidden History of Orford Ness*. The History Press and National Trust.
- Mitchell, Laurence (2018) *Slow Travel Suffolk: local. Characterful guides to Britain's special places*. Bradt Travel Guides.
- National Trust (2018) *National Trust 2018 Handbook*. National Trust.
- National Trust (2018) *Orford Ness*. National Trust.
- National Trust (n.d.) *I Spied on Orford Ness*. National Trust.
- Wainwright, Angus (2009) 'Orford Ness: A landscape in conflict?' in Forbes, Neil et al. eds. *Europe's Deadly Century: Perspectives on 20th century Conflict Heritage*. English Heritage.
- Williamson, Tom (2005) *Sandlands: The Suffolk Coast and Heaths*. Windgather Press.
- Woodward, Rachel (2004) *Military Geographies*. Blackwell Publishing.
- ゼーバルド, W. G. (鈴木仁子訳) (2007) 『土星の環: イギリス行脚』白水社
- 橘セツ (2013) 「英国農業革命期の文化遺産としてのモデル農場の展示と教育的ツーリズム: 東イングランドのウィンポール・ホールとナショナル・トラストの展示・管理をめぐって」『神戸山手大学紀要』第15号(13-28)
- 橘セツ (2017) 「英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時のガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学」『神戸山手大学紀要』第19号(49-68)
- 橘セツ (2018) 「英国サフォーク州サットン・フーをめぐる景観管理の文化地理学: 1990年代以降のナショナル・トラストによる文化遺産展示の思想と実践」『神戸山手大学紀要』第20号(29-46)
- マッシュューズ,ディヴィッド (中村ひろ子訳) (2013) 『ベンジャミン・ブリテン』春秋社